

幼児の Narrative Skill 習得を促す学習環境： 親の語りの引出しの向上を支援するシステムの開発

Development of the System which Supports Parental Narrative Production

佐藤 朝美

Tomomi SATO

東京大学大学院学際情報学府

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo

〈あらまし〉 本研究では、幼児の物語行為における親の役割に着目する。欧米の Narrative Skill 習得に関する先行研究では、語りの引出しが上手な親とそうでない親がおり、その差が子どもの語り方や考え方にまで影響しているという結果を示している。本研究では、それらの知見を踏まえ、“Narrative Skill 習得を促す親の語りの引出し”の向上を支援するシステム環境を構築する。

キーワード：幼児教育、語りの引出し、Narrative Skill、自己調整学習、ビデオ

1. はじめに

人にとって物語ることは知識や経験をもとにして想像世界をことばで表現する重要な営みであり、幼児期での物語る行為を充実させ、言語発達を促進させていくことが非常に重要であると考えられる。

佐藤(2008)は、物語行為の活性化により言語発達の促進を想定した幼児のためのソフトウェアを開発している。ソフトウェアに実装された「表情変更ボタン」や「アクションボタン」などの機能により、発話が賦活され、発話内容の種類が豊富になることが分かった。特に、登場人物の表情を付加する機能から、発達の初期段階には産出が難しいとされる心情に触れる発話が増加した。一方、これらの機能は、保育者や親が日常的に絵本の読み聞かせなどで行っている「促し」の行為の一つと捉えることもできる。幼児の日常生活におけるコミュニケーションでは、とりわけ聞き手としての大人、特に長時間共に過ごす母親の役割は大きい。そこで、幼児の言語発達を促す環境を考える際、母親を支援していく事が重要である。

2. 親の語りの引出しの方略習得とその支援

2.1. 親の語りの引出しとは

子どもの言語発達や記憶に影響しているものとして、母親の語りの引出し方法に関する研究が多くなされている。Fivush(2007)は、母親の会話構造により、過去の出来事を詳細に引出す事が出来るElaborative mothersと、単純な質問の繰り返しを行うRepetitive mothersの存在がある事を明らかにしている。

このような親の引出しは、子どもの Narrative Skillに影響するという。Narrative Skillについては、欧米のミドルクラスの白人において子どもが身につけるべき重要なリテラシーとして捉えられ、多くの研究が行われている。McCabe and Peterson(1991)はこのスキルの縦断的研究を行い、3歳から6歳にかけて本質的な発達があり、家庭における所得や文化によって差がある事を指摘している。

日本における状況はどうであろうか。Minami(1994)は、日本人、米国在住の日本人、米国人の親子を比較し、日本の母親の語りの引出しの特徴として、1.あまり引出しを強要しない、2.評価を与えず、注意を示す事が多い、3.女の子より、男の子により注意を払う、4.子どもが長く話す事を認めるのではなく、頻繁な相互のやり取りを行う等を見出している。さらに、

日本の子どもの話す量が欧米の半分であるという。また、小松(2000)は、親が子どもと話すときの目的が「経験の共有」であり、子どもの園生活を把握しようと働きかける事を見出している。自分の子だけでなくクラスの友人までも触れるという特徴から、子どもの話のスキル向上が目的ではないという事が分かる。つまり、Narrative Skillというリテラシーの習得を行う環境で育っていない日本人の親は、その概念と語りの引出し方略を持ち合わせていないと考えられる。しかしそれは、欧米の低所得者層の人たちと同じ理由ではなく、子どもとの対話を重視しているが、「子どものNarrative Skill習得」のためにじっくり話させる事を念頭においていないと考えられる。

2.2. 親の語りの引出し方略習得における問題

Petersonら(1999)は、低所得者層の親子20組を対象に、親の語りの引出し向上の訓練を1年かけて行っている。まず、実験群の親に普通の会話で下記6つのポイントを行うよう伝える。

- (1) 過去の経験について、継続的に話す
- (2) 各テーマについてじっくり話す
- (3) 'yes/no' questions を少なく、'wh' questions を多くすると同時に各出来事の状態や設定—特に場所や時—について質問する
- (4) 子どもが話している事を注意深く聴き、詳細を話すよう引出す
- (5) 相槌をしたり、復唱する事により、子どもが1文以上話すよう激励する
- (6) 子どものリードに従う事、子どもが話そうとしている事について話す

さらに、研究者は、月1回の家庭訪問あるいは電話で母親を励ます事を繰り返す。この実験では、1年後の母親の語りの引出し(表1)のうち、

表1: 語りの引出しの種類

①Open-ended prompts	「それから何があったの?」「何をしたの?」のような情報を得るための制約のない質問・プロンプト
②Wh-context questions	文脈の特定情報(5W1H)を得る質問・プロンプト
③Back-channelling	「うん・それで・もっと教えて」等の応答、または子どもの発話の復唱
④Yes/no questions	「はい/いいえ」で答える質問

詳細を引出すとされる①②③が上昇したという結果を得ている。

しかし、この実験のような日常の任意での繰り返しでは以下の点で効果的に学べないと考ええる。

引出し状況の振り返りを自身で正確に行う事が出来ない。: 子どもの Narrative Skill 習得の概念がない母親達には、実際の対話の中でどのような引出しを行い、そこから子どもがどのように引出されているのか、そして全体を通して子どもが何を語ったかを逐次正確に振り返る事が有効であると考ええる。

他親子の引出し状況を確認出来ない。: 母子対話は、母親が子どもの言語発達の段階や志向性に合わせて語りかける事により生ずる等複雑な要素が絡み合った相互作用である。そのため、多様なケース、特に上手に行っているモデルを観察する事が重要であると考ええる。

他者の優れた方略を我が子との対話にどのように展開するか吟味出来ない。: 前述の通り、様々な要素が絡む対話では、例えば子どもの言語レベルの状況により、上手な他者の方略がそのまま使えるとは限らない。そこで、他者の方略を知ると共に、実際自分達にどのように展開できるか吟味する事も重要と考ええる。

以上の事から、語りの引出し方略の習得は各親に日常で任意行ってもらうのではなく、

- 引出し状況を自身で正確に振り返る
- 他親子の引出し状況を共有する
- 他者の優れた方略を自身の対話にどう展開するか吟味する

ことが可能な環境において、定期的に課題をこなしていくことが有効であると考ええる。その方法としては、親子で物語を作成する場面を録画し、そのビデオクリップを利用していく事が適していると考ええる。そこで、ビデオクリップを用いて自身の振り返り、他者の引出し状況を共有、効果的な形態で数多く観察できるようにする事、さらにそこから自身に合った方略を吟味出来る事を設計要件とした環境を構築する。

以上の事から本研究では、“Narrative Skill 習得を促す親の語りの引出し”の向上を支援するシステム環境を構築する事を目的とする。

2.3. 親の語りの引出しの向上支援環境の構築

本研究では母親を、語りの詳細を引出す方略

(表1の①②③)を習得する学び手として捉え、支援機能を構築する。ではどのように学習を成立させるべきか。前述したとおり語りかけは、子どもの言語の発達段階を考慮しながら引出しを適宜調整し、展開していかなければならない。Zimmermanら(2006)は、学習の目標の達成に向けて、自らの行動や思考を組織的に適用していくような学習を自己調整学習と呼んでいる。

自己調整は、3つの基本となる下位過程、「自己観察」「自己判断」「自己反応」から構成されるものとして概念化されている。これらの下位過程は、相互に作用しあうもので、学習者は自らの行動のある部分を観察しながら、基準に照らして判断を行ったり、肯定的、否定的に反応をしたりする。また、学習環境と無関係に作用するものではなく、環境要因が自己調整の発達を支えているところがあるという。

本研究で支援する語りの引出しの向上は、Zimmermanらの自己調整の仕組みを備えた学習が適するものと考え、自己調整を促すその下位過程を支援する機能を構築する(図1)。

活動としては、課題で設定したテーマについて親子(子ども主導)で物語を作話してもらう。作話過程において母親には、子どもがより詳細を語るよう引出しを行ってもらう。それらの活動をシステムとして以下のように支援する。

Step1:物語作成 まず、親子で物語の作成を行い、その様子を録画する。「自己観察」は、実際の行動を正確に把握する事が重要である。そこで、録画したものを自己観察し、何度かトライ出来るようにする。

Step2:物語評価(絶対基準) Step1の物語作成状況を自己評価する。「自己判断」は、現在の遂行レベルと目標とを比較する事により達成される。目標のタイプとしてはまず絶対的基準が必要である。そこで、実際作成した対話のなかで、目標となる親の語り引出しがどれ位含まれ、それにより子どもがどう引出され語っていたかを確認する。

Step3:物語評価(相対基準) 他親子のビデオクリップを観察していく。「自己判断」では、他人との比較・観察を行う事で行動の適切さについて判断する事が出来る、自らの遂行レベルも評価する事が可能になるという。また、自分と似た人が課題に取り組んでいる事を知れば、自己効力と動機付けが促されるという。そこで、

システム側では、ある程度詳細な引出しが出来る他親子の中でさらに質問の種類に近い形態の親子のリストを先に表示する等行い、積極的に見る事が出来るように支援する。

Step4:物語評価(自己判断) 抽出したポイントと自身のビデオクリップとを比較しながら、実際自分が利用可能な方略について吟味する。絶対基準と相対基準からみた自己の遂行状況に対し、自己判断が深まるよう支援する。

そして次の課題を行うため、再びStep1:物語作成へ戻る(自己反応)。

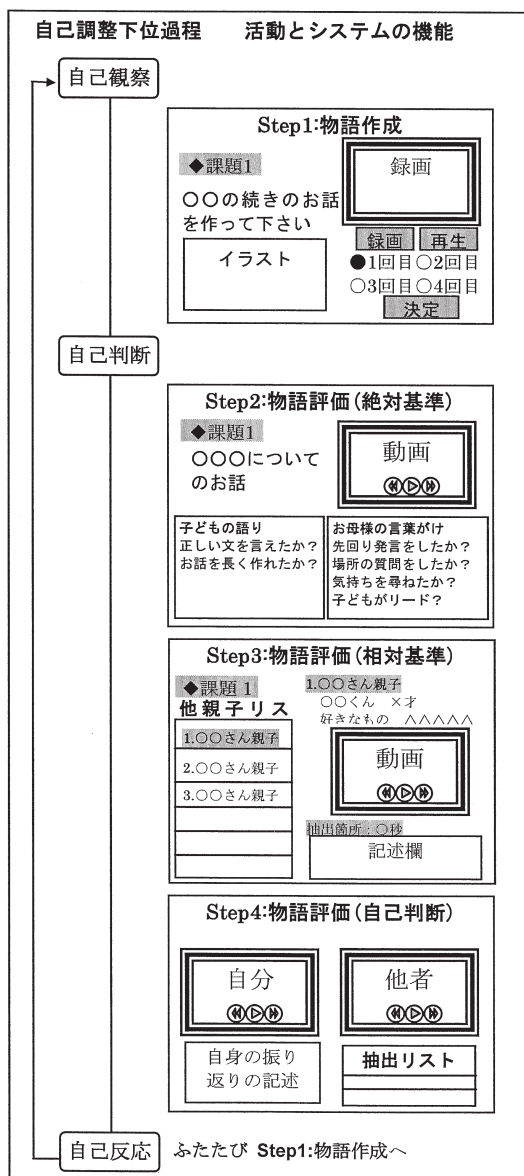


図1: 自己調整下位過程とシステム支援機能

3. システムの構成

本システムでは、ビデオの録画・再生の制御部はAdobe Flashを用いて開発する。構成は以下のとおりとする(図2)。ユーザは、物語の作話状況をWebカメラで録画し、アップロードする。映像はFLV形式で、Flash Media Serverに蓄積される。ユーザ情報は、MySQL上で管理されており、その制御は、PHP経由でFlash Action Scriptにより行う。ユーザはFlash Player上で全ての操作を行う。

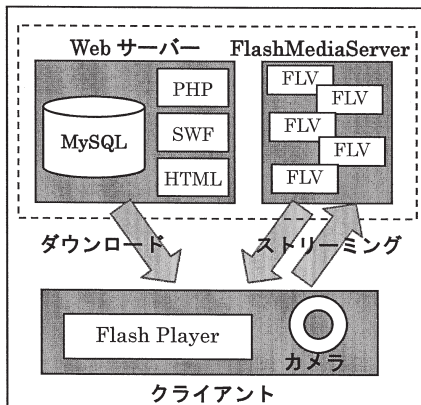


図2：システム構成

4. 評価

提案したオンライン学習環境が、母親の語りの引出しの向上を支援するシステムとして機能するかどうか検証するための評価実験を行う。

4.1. 被験者と手続き

幼稚園年長児の親子30組、男女同数を対象として、2週間かけてオンライン学習環境で課題を3つこなしていくという実験を行う。1日目には集合してもらい、質問紙調査、事前テスト、使い方の説明を行う。2週間後に事後テストとしての最終課題を行う。

本システムでの課題は、「欠如一補充」の枠組み(内田 1996)を用い、大人が“主人公が困った状況に陥った絵についてお話”を聞かせ、その続きを子どもに作話してもらう。具体的には身近な素材として幼稚園の登園時の状況、運動会、喧嘩について、空想の素材としては流れ星や魔法の杖について作話してもらう。

4.2. 評価方法

本研究では、母親が語りを引出す方略として、より詳細な引出し(表1の①②③)に向上していく事が目標である。

そこでまず、事前テストから3つ課題をこなす中で、引出しがどのように変化していったかの確認を行う。ビデオクリップから引出し部分を抽出し、量的な変化を確認する。次に、その変化が本システムの機能から生じたものであるのか、その場合、システムのどの機能が寄与していたのかという詳細を見る。特に自己観察や自己判断状況を自己評価や他者共有、吟味する部分での記述やアクセスログ等から質的に評価する。インタフェースについては、事後アンケートにより評価を行う。

参考文献

- Fivush, R., (2007) Maternal Reminiscing Style and Children's Developing Understanding of Self and Emotion. *Clinical Social Work J* (35), pp37-46.
- 小松孝至 (2000) 幼稚園での経験に関する母子の会話に対する母親の意義付けと働きかけの認知. *教育心理学研究*, 48(4), 481-490.
- McCabe, A., Peterson, C. (1991) Getting the story: A longitudinal study of parental styles in eliciting narratives and developing narrative skill. In A. McCabe, C. Peterson (Eds.), *Developing narrative structure* (pp. 217-253). Lawrence Erlbaum Assoc Inc.
- Minami, M. (1994) English and Japanese: Cross-Cultural Comparison of Narrative Elicitation Patterns. *Issues in Applied Linguistics*, v5 n2, pp.383-407
- Peterson, C., Jesso, B., & McCabe, A. (1999). Encouraging narratives in preschoolers: An intervention study. *Journal of Child Language*, 26, pp.49-67.
- 佐藤朝美(2008), 幼児の物語行為を支援するソフトウェアの開発. *日本教育工学会論文誌*, Vol.32, No1, pp.33-42.
- 内田伸子(1996) 子どものディスコースの発達, 風間書房, 東京
- Zimmerman, B. J., Schunk, D. H., 塚野州一ら(翻訳) (2006) 自己調整学習の理論. 北大路書房, 京都